

## おかえりのせなかで

\*\*\*\*\*

「おかえり、ドーナツ食べる？ ぐは♡」

「……かおるちゃん……」

ドーナツ屋の車の窓から顔出したかおるはんを見つけたとたん、ピーチはんたち、バタバタ走り出してったわ。

ラピリンスでの戦いが終わって、ようやっとピーチはんたちの世界に戻ってきたんやなあ。

最初は誰もおらへん公園しか見えへんもんやから、あのメビウスの電線ドカドカでみんなやられてもうたんか、てビクビクしとっただんに。

さっすが兄弟、かおるはんや。顔見るだけで、終わらなかつちゆう気持ちになるわ。

「あれが、兄弟か」

となりで立つとつたウエスターはんが、車の方をぼんやり見てる。何度も会<sup>あ</sup>うてるはずなのに、やっぱり、何や変わってくれたんやな。

「せや。さあ、新しい兄弟連れてきた、て挨拶に行こか」

「いや」

わいが足に手かけて引張ろうとしたら、ため息交じりの声がやってきたわ。なんやろ、て上向いたら、

「後にしよう。あれは、邪魔できないだろう」

ウエスターはんが指さしたとこ見てみたら あーあ、ピーチはんなんて、車の窓越しに抱きついてもうてるやないか。もう、しょうないなあ。

「せやな」

みんなが車の窓から離れるまで、わいらはしばらく、そこに立つとつたわ。

\*\*\*\*\*

「さーさ、さっさと家に帰りなよ。ドーナツなら、あとでいっぱい作っただげるから」

みんなにドーナツ渡したかおるはんがそう言ったけど、なんや、みんな顔見合わせとるなあ。さあて、そろそろわいの出番やな。

ひとつ走り、車のそばまで走って行って、ピーチはんの肩によじ登って、と。

「せやで。ピーチはんのお母はんには、わいもぎょうさんお世話になっただんや。はよ顔見せて、安心させたげなあかんわ」

家がどないなってるかわからんから、帰るのが怖いっちゅうのはわかるんやけどな。お母はんたち、もつとずつと心配してるはずや。

わいが言ったのに、最初につなずいてくれたんは、パッションはんやった。

「そつね、きつとこ両親が心配してるわ。みんなは

早く帰ってあげて」

「せつな！ お母さん安心させるんだから、一緒にやないとダメでしょ!？」

ぐるんと体まわすもんやから、落ちそうになつてもうたやないか。まあせやけど、ピーチはんの言うのももつともや。あのお母はんやからなあ。

「それはそつなんだけど、ウエスターたちが、あ、サウラーは？」

「あいつは、この世界の本を仕入れに行つてる。これからのラピリンズの参考にするそつだ。もちろん俺も、置いて行って構わないぞ」

いつの間にやらそばまで来とつたウエスターはんの顔、パッションはんがじーっと見とる。なんや、不安そうやなあ。あ、せやせや。

「兄弟！ 帰った早々悪いんやけど、ウエスターはん預かってんか。新しい兄弟やから！」

ピーチはんの肩越しに、車の方に向かつてそう言うたら、かおるはんが車の窓でほおづえついてん。

「ん？ あ、そう。 いいよ。」

あれ？

「ありがとう、 かおるちゃん。 それじゃ、 行つてくるわ」

アズキーナはんとシフォンを肩にのせたパツションはんと一緒に、 みんなで家に向かっていく途中、 わいは何度か、 車の方を振り向いてしもたわ。

「なんや、 妙な感じやったけど。 大丈夫、 やるな。 かおるはん、 わいの兄弟なんやから。」

\*\*\*\*\*

「イスたちがそれぞれの家に帰っていったあとを、 俺はしばらく眺めていた。」

「それにしても、 ここには何度も来ていたはずなのに、 感じるものがまるつきり違つ。 暖かい日差しと、 背中からのいい匂い」

「ラピリンスにも、 これが必要なんだろうな。」

その暖かなラピリンスで、 俺はいつたい何をすればいいんだ？

日差しを見上げながら、 俺は考えた。

「サウラーは本を集めて今後のことを考えているよ。 うだし、 イースも口には出さないが考えはあるようだ。 でも俺は、 残念だがそれほどの頭はない。 あるのはただ力だけ、 か。」

「なに？ 必要つて、 ドーナツかい？」

「背中からの声に振り返ると、 ドーナツ屋の店長が手を動かしていた。」

「答えようと口を開きかけて、 俺はちよつと考えた。」

「店長っていうのもなんだな。 たしか カオルちゃん、 だったか？」

「故郷こくにに帰つても、 ドーナツ作りたいんだろ？ だったら、 これもつてきなよ。」

「窓の前で口ごもっている俺の前に、 店長——カオルちゃんの手が伸びてきた。 手の上には、 小さな銀」

の板がひとつ。

「これは 鍵か？」

「そ。この車と同じの、もう1台作ってもらってね。その鍵」

俺の目は、鍵と、カオルチャンの顔の間を行ったりきたりしてしまった。

「いや、さすがにそこまでされるわけには」

「そう？ じゃ、車の代わりに、うまいドーナツの作り方、教えてあげよっか」

そう言っつて、車の窓から消える姿は、どう見たってあまり考えてるようには見えない。だが、

「作り方より、教えてくれ。全部わかっていて、タルトくんはドーナツを渡したのか？」

車の影から本を持って出てきたサングラスの顔が、不思議そうに俺を見つめてきた。

そっだ、彼は俺たちの世界を変えた。プリキュアと一緒に。俺と同じ、あまり考えているように見えないのに

「ああ、みんなが言ってたあれ？ オレのドーナツ食べて、兄ちゃんとの国民が目覚めたって、あれ？」

まさか、そんな役に立つなんて思わなかったなあ。ぐは」

笑っつて言う顔にイライラして、思わず怒鳴ろうとした俺の前に、指が一本出てきて、

「あれね。どこに行つても、なにがあつても、オレのこと思い出して欲しかっただけよ。ドーナツ食べるときだけでもさ、オレはいつでも見てる、つて。

オレはドーナツみたいに役には立てないけど、ドーナツをすることはできるからね。ぐは♡」

大口で笑われて、俺は口が開けなくなった。見てるだけ、か。どうもゴマカされたような感じだかん？

「るちゃーあぁー！」

なんだ？ 誰か、叫んでるような声だな。

声のする方を探してみると ああ、公園の中に

土煙がまっすぐ伸びている。あれか？

\*\*\*\*\*

「かおるちゃーあぁーん!!」

「バカ、バカ、バカ、大バカっ!」

土煙がだんだん近づいて来て、人の形がはつきりわかるようになって　なんだ、ラブちゃんと、イスじゃないか。

なんだってあんな勢いで走ってるんだ？

「かーおーるーちゃーんーのおーおっ!」

ああ、私の合図に気づかなかったのね。ウエスターがしりもちついちゃってるわ。

階段を一段飛ばしで駆け上がって、俺たちの方に向かってくるラブくんの後ろで、手を思い切り振りながら走るイス　その合図に気づくのが、少し遅かった。

私は起き上がるのに手を貸しながら、少しラブたちから離れた。ウエスターなら、止めちゃいそうだから。

「気の済むまでやらせてあげて。あのね　」

\*\*\*\*\*

「大バカあああつっ!!」

気がつくと、俺を弾き飛ばすほどの勢いで、ラブくんの拳がカオルチャンに突進していった。

「怖い思いさせて、ごめんね、お母さん!」  
ラブの家で、ラブのお母さんにしばらく抱かれてから、ラブがそう言った。

そう、私たちが一番心配していたのは、メビウスの攻撃だったから。でも、思い出させて怖くなったりしないかしら

そう思っただけで上がったラブのお母さんの顔は、少し笑ってた。静かに、微笑むみたいに。え？

「すごかったのよあ、もう。テレビで見てたケープルがね、クローバータウンではなぜか、あたしたち目掛けて襲ってきたんだから」

やっぱり 多分、ラブやブッキーたちのお父さんお母さんを、まず狙ったのね。すごく怖かったでしょうに

「せつちゃん、そんな顔しないの」

なのに、私のあたまをなでてくれる。とってもあつたかい手です。

「そりゃあ、最初は怖かったわ。でも、あたしももうダメって思ってたとき、どーんと突き飛ばされちゃって。気がついたら、みんな家の中に押し込められてたのよ」

え??

「な、なにそれ？ メビウスが、わざわざラブと一緒に顔を上げたら、目の前で優しい顔が横に振られたわ。」

「違う違う。人の手よ」

私たち、ふたりで顔を見合わせた。

「すごかったわ。お父さんや伊吹さんのご主人が表に出ようとしているの、一喝して止めちゃってね。『絶対に外に出るな』って。『親が無事なら、お嬢ちゃんたちは闘える』って言ってたわ」

お嬢ちゃん？ っ、まさか！

「あたしたち目がけて飛んできたケープル、みんな自分で受け止めちゃってね。『1分でも、ほんの1秒でも、安心して長く闘えるなら、なんだってしてやる』って言って」

私の目の前に、ひとつの姿が浮かんだわ。何本もケープルを受け止めて、それでも決してあきらめない、サングラスの

「町のみんな、一度はパニックになりかけたのよ。でも ケーブルだらけになって、それでも名前を呼び続けているのを見て、みんな静かに家へ戻ったの。ずっと、ずっと、声が聞こえてる間、祈ったわ。せつちゃんや、ラブや、タルトちゃん——兄弟って呼ぶ声が途切れるまで」

「か かおる、ちゃん？」

ぼやけた目の前で、しつかりうなずいたラブのお母さんの目に、涙が浮かんでた

「だから、わたしたちは怖くなかった。たとえどうなっても、あなたたちが帰ってくれば大丈夫。あの人が信じてるのに、親のわたしたちが信じないでどうするの？」

最後の最後、なにも考えられなくなるまで、信じて祈り続けたわ——」

その瞬間、私の隣ではじけた。

「お母さん、ごめん——」

声と、玄関をバンッ、と開ける音が重なって響く

中で、私も立ち上がった。

「ごめんなさい、私も行きます！」

最後に見たのは、笑って手を振る姿だったと思う。

多分、そう思う。

\*\*\*\*\*

「かおるちゃんがし 死んじゃったら、悲しむのはあしたちだけじゃないっ！ クローバータウンのみんな みんな、みーんなよっ！！」

叩く力がどんどん弱くなって、今はもう、ただ拳を押し付けてるだけ。だけどまだ、ラブは頭を上げなかった。

「あの攻撃を生身で受け止めるのは無謀だ。だが、それを言うなら——」

話を聞いたウエスターがそう言うのを、私は指で止めて、

「ラブも、わかってるのよ」

かおるちゃんの方に向き直っても、まだ、ラブは顔を上げてない。

「自分に言ってるの。あれは」

そうよ。無謀っていうなら、自分たちだけでメビウスと戦おうっていう方がよっぽど無謀なもの。だけど、

「なんで　　なんで怒んないのよあーっ」

やっと、ラブが顔を上げてくれたところに、指がある。さつきから、かおるちゃんはずっと待ってたんだものね。

「んじゃあ、えい」

おでこを指ではじめて、それでおしまい。

「あいたっ　　え？これ、だけ？」

「お母さんたちに、ちゃんと行ってから行ったからね。でなけりゃ、こんなんじゃ済まないよ。

ほら、友だちが来たよ。行ってきなよ」

公園の奥から、ブッキーとミキちゃんが走ってくるの見えるわ。かおるちゃん、ラブの背中を押し

出して、

「さっすがに3人がかりで叩かれると痛いからねえ、げは」

ラブが走っていくの、笑いながら見てる　　ふりしてる。やっぱり！

「お、おいイース。なにする気だ？」

ウエスターの声を背中に聞きながら、私はかおるちゃんに近づいていった。

\*\*\*\*\*

「かおるちゃん！」

私が目の前に立つたら、かおるちゃんがお腹を向けて、

「ん？せつちゃん嬢ちゃんも、叩きたい？」

やっぱり、私にもそう言うんだわ。もう！

「違うわ。どっしてあんなことしたの？」



「イス、おまえさつき、わかつてるって」

ウェスターの言葉を、私はらんで止めた。ラブにまで、聞かせたくないのよ、こんなこと

「私たちの無謀とは、意味が違うわ。かおるちゃんのは、捨石すていしでも構わない、っていう無謀よ！そんなのじゃ、いつか本当に !!」

「オレはね、見守みまもってるだけだよ」

え？

いきなりの答えに、言葉が出なかつたわ。いま、なんて？

「オレ、頭よくないからね。オレを受け入れてくれたこの町と、ドーナツ屋を始めさせてくれたお嬢ちゃんたちを、ずつと見て守ってるだけなんだよ」

ラブたちが ? じゃ、なくて！

「それと、無謀なこととどついう」

「そうかー！」

私が言いかけた言葉が、ウェスターの声でかき消

されたわ。

なによいきなり っで見回した先に、ウェスターの顔があつて、

「なるほど、見るじゃなくて、見守みまもるか」

まんまるに開いた目と口。まるで、夢でも見てみたい。なに？ そんな驚くようなこと言ったの、いま??

「そう、見守みまもるんだよ、オレ流りゅうにね。時と場合によっちゃあ、命を賭けてでも見守みまもるのさ。」

ドーナツにやあなれないけど、ドーナツは作れる。だろ?? ぐは♡」

「あのドーナツになれなくても、作れば そうか、俺は、見守みまもればいいんだな」

かおるちゃんの言葉に、ウェスターが何度もうなずいてるわ。ちらつと私を見たような気もするし

と、思ったら、今度はかおるちゃんが私をちらつと見て、ウェスターの肩たたいたわ。なに？

「ウェスターの兄弟、でいいかい？ 悪かつたね、さっ

きは。本当に兄弟だとは思ってなくってさ」

「カオルちゃん兄弟。さっきの鍵なんだが　もら  
うんじゃなくて、借してくれないか？」

「いいとも、兄弟！」

二人とも、私を無視して盛り上がっちゃって。ああ、  
これ以上騒いだら、ラブたちに気づかれちゃう  
これじゃ、私ひとりがおバカみたいじゃない！

「何わけわからないこと言ってるのよ。ふたりとも、  
バカじゃないの!？」

私がそう言ったら、同時に振り返ったふたつの顔  
が私の目を見て笑顔に変わったわ。

「そつとも！　バカなんだ、俺たちは」

私、思わず二歩くらい下がっちゃった。

だって、こんなに晴れ晴れしたウェスターの顔、は  
じめてみるんだもの